

学位論文審査の結果の要旨

氏名	Panatda Utaranakorn
審査委員	主査 古塚 秀夫 (印) 副査 能美 誠 (印) 副査 井上 憲一 (印) 副査 松田 敏信 (印) 副査 安延 久美 (印)
題目	A study on the characteristics of farmers' management capability in Thailand (タイにおける農家の経営能力の特徴に関する研究)
審査結果の要旨 (2,000字以内)	
<p>本研究は、タイの農業生産者の農業経営管理能力について、その特徴を明らかにしようとした研究である。特に中進国において農業経営管理能力の問題を取り上げた研究はほとんどなく、先駆的な研究であるといえる。ただし、先駆的な研究にはありがちであるが、先行研究例が少ないことや分析視角の設定等はまだ工夫の余地が残されている。そのような限界があるとはいえ、当該論文の価値を損なうものではなく、農学（博士）に値する研究成果であるといえる。</p> <p>本研究は、タイにおける農家の経営能力の特徴を明らかにし、学術的に空白となっている部分を研究において扱うことが試みられている。東北タイにおける家族経営農家を対象に、農家の経営能力に見られる特徴を、特に「個人特性」と「意思決定」の2側面に着目して明らかにした。さらに、農家の経営能力と農業生産の経営成果との関係を確認した。研究方法は、タイ国コンケン県内の5つの農村に居住する農家世帯の世帯主（もしくはその妻）に対して、2012年8月から2016年8月の間に数回にわたり実施されたインタビューに基づいている。対象農家は無作為に抽出されているが、最低1つの農業用ため池を保有していることを条件とし、また、農家間で土壌肥沃度に大きな差異がないことを考慮して選定されている。</p> <p>主要な研究結果については以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 農家の能力と態度の2点に注目し、経営者能力のうちの「個人特性」を測定した。 <p>農家の能力のレベルは9技能から構成される管理能力に関する非認知的能力テストを利用して測定された。その結果、対象農家の間ではリスク指向性、資源の運用、意思決定、コミュニケーション能力、目標設定能力に対する理解度が高いことが示された。一方で情報収集能力や財務・会計管理能力、マーケティング能力に対する理解度は中程度にとどまっていた。農家の能力レベルに寄与する要因は、グループ活動への参加と農家の財務・会計管理能力、マーケティング能力、目標設定能力との間に有意な正の相関関係がみられ、さらに、世帯収入と情報収集能力、農家の年齢と意思決定能、保有する水田の面積と目標設定能力の間にも、強い正の相関が見られた。</p>	

2. 農家の経営管理および経営発展に対する態度について、経営効率性を基準にして効率的な農家と非効率的な農家に分類し、この二者の間で比較分析を行った。

その結果、農業経営および経営発展に対する態度に関して、両者の間に大きな差異は見られなかった。どちらのタイプの農家であろうと、農業経営の成果により関心を抱いている者は、情報や意見の開示に積極的であり、財務上のリスクを負うことにも抵抗が少なく、農業に関わる活動にストレスを感じることなく、むしろ楽しみを見いだしていた。加えて、農家は自身の農業経営を発展させていくにあたって、農業生産の質の向上と生産コストの削減が最も重要な課題だと認識していることが明らかになった。

3. 「意思決定」の側面に関して、まず、農家が農業に関する情報をソーシャル・ネットワークにおいて入手・共有する過程を明らかにし、農家が何らかの農業問題に直面した際に下す意思決定の過程を例証した。知識獲得に関する調査結果からは、対象農家は自らが所属する社会的ネットワークにおける農家同士の情報交換によって、農業に関する情報に容易にアクセスできていることが明らかになった。また、経営能力の高い農家は、地域コミュニティにおける情報交換の中心となっていることがわかった。これは、農業問題に関する相談をする際、農家は、外部の人間より同じ地域ネットワークに属している者のほうが相談しやすいこと、能力の高い農家は自身の知識や技術を他の農家と共有することを好んでいるからであることが示された。

4. 問題に直面した際の農家の「意思決定」に関する事例研究では、まず農業経営に関わる諸問題を抽出した上で、その深刻度を評価し、次にそれぞれの問題に対して農家がどのような対応を行ったかを調査した。その結果、調査地において主要な農業問題は、深刻な干ばつであり、次いで販売用農産物の価格低下が挙げられた。問題の解決に関しては、深刻な問題を抱えている農家の半数は、その問題に対する解決策を年次ごとに決めているため、同様の問題に再び直面する可能性が高い傾向がみられた。一方で深刻な問題を抱えていない農家は、問題の処理、ひいては克服のために、複数の解決策を探した上で、それらの効果を分析し最適な策を選定・実施していた。このことを、特に経営成果において効率性の高い5戸の農家を事例に例証し、意思決定の違いが農家間における経営成果の差をもたらしている点について考察を加えた。

5. 経営能力の優劣が経営成果にもたらす差異をみるために、対象農家の効率性を測ることで、彼らの業績を評価した。包絡分析法（DEA）を用いた分析結果から、調査地の農家にとって技術的効率性、資源分配効率性、経済的効率性の向上が喫緊の課題であることが示された。雨季の初めにキャッサバの栽培を始め、10ヵ月~11ヵ月後にそれらを収穫することは、上述した3つの効率性すべての向上につながっていた。また、技術的効率性と資源分配効率性に関して、2つ以上の灌漑設備へのアクセスが可能な農家は技術的効率性が高い傾向にあり、農場規模の小ささと家族労働力の大きさは資源分配効率性に対して正の相関を示していた。しかし、この分析では、経営能力の優劣と経営効率性との明示的な関係は見出すことができなかった。

本研究に関わる一連の調査結果から以下の結論を得た。1) 東北タイにおける対象農家は、管理能力、資産分配能力、新技術の導入と生産量の最大化、効率的に問題を解決するための意思決定に関して、十分な経営能力を持ち合わせていない。ゆえに、それらすべての経営能力の改善は重要な課題である。2) 農家の経営能力向上を図るうえで、農家間での知識移転の過程は考慮に値する重要な要素であるといえる。3) 農家の意思決定をより効率的なものにするためには、彼らに対し、どのように代替的な方法を見つけ出し、その影響を分析し、最適な選択肢を選ぶのかを教授する必要がある。